

歴史における科学とキリスト教

村 上 陽一郎

皆様、こんにちは。フローレス学長、そして渡邊先生、ご紹介いただきましてありがとうございます。こういう機会をいただいたのを大変光栄に存じております。

今ご紹介にありましたように、科学技術の歴史を主に勉強してきた人間として、キリスト教との関係というのは、個人的な信仰とはまったく別に、学問的にも、いつも基本的な主題となっております。長くそういうことにも、少しずつ考えをめぐらしてきた人間として、今日は「歴史における科学とキリスト教」というタイトルでお話しをさせていただくことにいたしました。

私が学生だった頃、もう 50 何年前になるわけですが、その頃には、伝統的な解釈で人々の常識ができあがっていました。キリスト教というものを科学の側から問題にするときには、正に、ガリレオ事件だとか、ダーウィンの進化論について——イギリス国教会のウィルバーフォースという聖職者が、ダーウィンの進化論に反対して、これを揶揄するような、「あなたの祖先は猿から来たんですか」というようなことを聞いたときに、ダーウィンがそれに対して毅然とした答えをしたというような話が伝わって——キリスト教は、科学の発達に対して常に頑迷な阻害者といえますか、それを抑制する立場に立ってきた、という解釈が一般的でございました。

それをそのまま現在の常識といえるかどうかはわかりません。しかし今でも、一般的な常識の中には、そういう考え方が残っていないわけでもない、と思われれます。しかもそれは、例えば歴史学においても、裏づけをされていたというようなところがございます。例えば、これもそれこそ 60 年近く前になるんですが、私が高校生だったときに、高校の歴史

の世界史の教科書では、「古代」、「中世」、「近代」という分け方が、これはもう堂々とありまして、しかも「中世」は必ず「暗黒の」という形容詞がついていました。「暗黒の中世」。これは要するに、キリスト教が、頑迷な、人間理性に対する抑圧者である、従って「中世」という時代は「暗黒の時代」であった、ということです。

それに対して、「ルネサンス」というのは、「近代の曙」というふうに銘打たれておりました。そして「ルネサンス」の主題というものは、結局、人間性の解放、あるいは回復であると。まあ、ローマの時代に戻るといふことなんでしょうけれども。当然、ギリシア・ローマ文化はキリスト教をもちませんから。

ローマといっても、ローマ帝国の後ろの方や、「西ローマ」あるいは「東ローマ」は、やがてキリスト教になるわけですが、基本的に、ギリシア・ローマの古典時代というのはキリスト教とは関係ありませんから、そうすると、ローマ時代に戻るといふことはキリスト教の桎梏から人間が解放される、その兆しというのが「ルネサンス」である、という歴史解釈が、これはある意味では学問的にも裏打ちされて、まかり通っていた——という言葉はきついでしょうか。一般的に、学校でも教えられていた——というふうに申し上げてよいと思います。

じゃあこういう歴史解釈というのがどこから出てきたんだろうか、ということをつりかえってみますと、これははっきりしているんですね。というのは、そもそも「古代」、「中世」、「近代」という区分けができる人は誰かといえば、当然近代人なわけですね。近代人でなければ、「近代」という概念は出てこないわけですから。そして、ヨーロッパ人にとってはごく自然なことなんですけれども、先ほど申し上げた、アテナイに始まる、紀元前5世紀くらいから始まるギリシアの時代と、それからそれを一応受け継いだといわれているローマを中心とした大帝国の時代、というのが「古代」である、というわけですね。

皆さんちょっと考えてみてください。今の歴史の教科書は必ずしもそう書いてはいないので、これもかつての話ですけれども、中高の歴史の教科書で、古代の終わりはいつか、古代文明の終わりはいつか、というと、はっきり西ローマ帝国の滅亡と書いてある。476年かな、昔、16、7歳のときに覚えさせられたから今でもたぶん覚えてるんだろうと思ひ

ますが。つまり紀元後5世紀、400年代の半ば過ぎに、西ローマ帝国が滅亡したら古代が滅亡したと。でも、考えてみてください。西ローマ帝国が滅亡したからといって、どうして古代、まあギリシアはともかくとして、ローマ文明が滅亡したということになるのでしょうか。だって東ローマ帝国というのは、堂々とローマの文化文明を継承して、しかもそれは1453年かな、15世紀の半ばまで、トルコに滅ぼされるまで、見事な文化圏を張っていたわけでしょう。それは全く忘れられていて、西ローマ帝国が滅亡したら古代ローマ文明も滅亡したっていうのは、これもまた不思議な話なわけですね。いろいろ不思議なことがあるわけです、今から考えますと。

そういう歴史観というのは、つまり、「古代」、「中世」、「近代」という、あたかもほとんど必然的な枠組みのように考えられている歴史区分というのは、当然ながら近代人が作り出したひとつの仮構に過ぎない、敢えていえば。不思議なことに、ヨーロッパの近代的な歴史学がそうだったものですから、日本の歴史を考えるときにもどうしても、その普遍的と称される枠組みを適用しないとイケない、というんで、日本も「古代」、「中世」、「近代」とやって、いったいじゃあ江戸時代はどうなるんだ、「近代か」っていったら、「近代じゃないよね」っていうんで、しょうがないから「近世」っていう不思議な言葉を発明して、「古代」、「中世」、「近世」、「近代」という不思議な日本史ができあがっているわけですね。日本史の本質にほとんど無関係に、ヨーロッパの近代的な歴史学の枠組みをそっくり輸入して、日本の日本史学もできあがっちゃったわけですね。これは基本的には明治以降のことですけれども。これは非常に不思議な話なんです。

じゃあそのヨーロッパ近代というのは何か。これは非常に定義が難しゅうございます。ただ私は、少なくともヨーロッパの近代というのは——とくにこの歴史学的な「古代」、「中世」、「近代」というような歴史区分を前提としてものを考える、というような考え方は——18世紀啓蒙主義の所産だというように考えて、まずあまり間違いはないだろうというふうに考えております。何か今は、「啓蒙」という言葉は使っちゃいけないんだそうですね、文科省が使わないように指導しているんだそうです。

「蒙」を「啓く」というのがよくないらしいんですが、そんなこと言っ
られませんか、「啓蒙主義」という言葉を使いますが。

「啓蒙主義」というのは18世紀、主としてフランスから始まった。こ
の啓蒙主義者たちは常に自分たちの時代を「近代」と考える。「モダン」
ですね。そして、「古代」と自分たちとの間で、星取表みたいなことをや
るわけですね。「古代」と自分たちとを比べてみて、例えばこういうこと
については「古代にもやっていた、我々もやっている、なるほどなあ」。
こういうことに関しては、「古代はやれていなかったけれど、我々はやれ
ている。お、我々1点」。というふうにして、「古代」と「近代」とを比
べて、結果的には「近代」がよりよいという最終的な判決をくだすわけ
ですけど、そのとき完全に無視されていたのが「中世」なんですね。

これはもう、「古代」と「近代」の中間にあって、まあ言ってみればど
うでもいい時代というような感覚で、「中世」という概念がこの啓蒙主義
者たちの歴史観の中に立ち上がってきた。「ルネサンス」という言葉をさ
きほど紹介しましたが——もちろん皆さまご存知の言葉なんですが——
実は啓蒙主義のあとに出てくる言葉であります。時代的に見れば啓蒙主
義より少し後の、18世紀から19世紀にかけて活躍したミシュレという
フランスの歴史学者がおりますが、彼がはじめて「ルネサンス」という
言葉——「ルネサンス」という言葉そのものはフランス語ですが——を作
り出しました。そしてそれをブルクハルトというドイツ系の歴史学者が
跡付けをして、はじめて「ルネサンス」という概念が歴史学の中に定着
することになります。

ですから、「ルネサンス」という概念も、先ほどの「近代の曙」という
印象をもった使い方をされているのは割合自然な話であるわけですね。
当然のことながら「中世」は「暗黒」である。そしてその「啓蒙主義」
の象徴、シンボルと言われているのがここでご紹介する『百科全書』で
あります。『百科全書』というのは、文字通り百科事典であります。だ
いたい18世紀の半ばごろに、かなりの時間をかけてフランスで編まれた
大百科辞典です。《*Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences,
des arts et des métiers*》まあフランス語で言えばそういうことになり
ます。《des sciences》、この《sciences》はむしろ「知識」という意味で
使っていると思います。それから《des arts》、《des métiers》ですから、

「知識」と「技術」と「方法」についての合理的事典とでも訳しましょうか。そういう感じで、この『百科全書』というのほとんどありとあらゆる知識と、それから方法を網羅した、大百科事典でありました。

これは主としてデイドロという人が編纂をして、ダランペールという人物がそれに助けを与えたといわれておりますが、そういう大百科事典です。この百科事典には、たくさんのイラストレーションが入っています。デイドロがなぜそんなにイラストレーションを百科事典に入れたかというところ…。例えば、鉄を鍛える、鋼鉄を作るといって、どういうことをやっていくかっていうと、ここで炉をきって、ふいごを使って云々という、そういうイラストレーションをちゃんと描くわけですね。だから、だいたいその通りにやるとまずまずのものができる、というほどの、たいへん親切なイラストレーションをたくさん描き加えている。銅版画ですけれど。

その『百科全書』の扉絵であります。中央に女性の顔がありまして、薄絹をまとった半裸の女性で、その足の爪先が下の方にあるわけです。これ全体が半裸の女性で、薄絹をまとっているんですが、周りに黒雲がありまして、後ろから光が差し込んでいる。見えにくいかもしれませんが、例えば右から手を差し伸べている人が、この半裸の女性がまとっている薄絹をひっぱっている、というような図であります。これがこの『百科全書』の一番最初の頁にあります。

この半裸の女性は何を意味しているかというところ、「真理」。《vérité》というふうにフランス語では——ラテン語では《veritas》ですが——書かれています。つまり、先ほど申し上げた啓蒙というのは、フランス語では《lumière》「光」というそのままですが、一般的に使われてますし、英語では《enlightenment》「光の中に置く」、ドイツ語では《Aufklärung》——これはクリアという英語に似た言葉ですが——「明らかにする」という意味をもった言葉が使われている。要するに暗かったもの、中世暗黒であったものを、人間理性の光で明らかにしていくこと、はっきりさせていくこと。隠されていた「真理」を人間の理性が光によって暴いていくこと。

下に何人か人影が見えるわけですが、その人影はすべて「学問」というふうにキャプションでは指定されていまして、つまりいろいろな「学

問」が「真理」の薄絹を取り去ろうとしている。今までは、「理性」の光は隠されていた。その黒雲は何を意味しているかといいますと、これは明らかに「宗教」を意味しているわけですね。つまり今まで、「宗教」は人間の「理性」を、いわばくらましていた。そういうくらまされてきた「理性」が、今や完全に解放されて、そして「真理」を暴く。隠されていた「真理」を、一つずつ、少しずつですけれど、我々の財産にしていく。その財産の一つのシンボルが『百科全書』でもあるわけなんです。そういう概念をこの扉絵はシンボリックに表現しているということになります。

『百科全書』の全翻訳はございません。残念ながら。ものすごく大部なフランス語で書かれたものと、イラストレーションですから。イラストレーションだけは、平凡社が『フランス百科全書絵引』という、大判の厚い、絵だけ、イラストレーションだけを集めたものを刊行してくれましたので、私どもの手に入ります。それから、このへんの研究をずっとなさっていた桑原武夫先生をはじめとする何人かの方々、『百科全書』の序論の部分、最初の部分を、フランス語から日本語に翻訳されたものが岩波文庫のなかにございます。その『百科全書——序論および代表項目』の中に、桑原先生が選択された四つか五つの項目の翻訳も加わっております。そのように、『百科全書』についてはなかなか日本語では手に入りにくいもので——もちろん研究書はたくさんございますが——『百科全書』そのものはなかなか目にすることができない。ファクシミリ版という、フランス語の何冊にもなっている大判のものが一番ポピュラーです。

その序論の中に、「学問」の分類というのが出てくるんですね。非常に面白いのが「神学」、神様の学ですね。「人間の学」というのがあって、その「人間の学」の一部に「神学」が含まれているという構成になっている。しかもですね、これは余計な話かもしれませんが。脱線するようですが。序論のなかで——ディドロがダランベールと一緒に書いたと言われていたのですが——彼らは、この『百科全書』は「アルファベット順」に並んでますよ、並べたんですよ、と、得々として書いているわけですね。我々からすると、日本語だったら「あいうえお順」——明治の時代だっ

たら「いろは順」かもしれませんが——そう並んでいるのはあたりまえですよ。『百科全書』がそうでなかったらおかしいと思うわけですが、彼らはそれを意図的に、わざわざ、この字引は「アルファベット順」に並んでいます、と書いている。

この理由は、私はこうだと思うんですね。フランス語を使ってもいいんでしょうけれども、わかりにくいでしょうから、一番簡単な英語にしますと、例えばですね、英語では「犬」は言うまでもなく《dog》ですね。これをひっくり返すと何になりますか。《God》になりますよね。「アルファベット順」に並べると、《dog》の方が《God》より先に来るわけですね。これなんです。デイドロやグランベールの言いたいところは。

要するにそれまで、これはあとでもご紹介しますけれども、17世紀までのヨーロッパでは、「学問」といえば必ずキリスト教神学の体系を土台にした学問であったんです。ですから、神の創ったと考えられている「犬」が、創り主である「神」よりも前にくることはありえないんです。それが、ここで意図されていることの一つの、隠れた意味なんですね。

啓蒙主義者たちすべてが反信仰だったとは言いきれません。この『百科全書』に寄稿している人は多士済々で、いろんな人がいます。例えば、ジャン・ジャック・ルソーもその一人ですね。ルソーは音楽家として当時知られていたわけで、だんだん後になって『エミール』とか様々な社会教育のようなこと、有名な二大告白録の一つと言われているものも書きましたが、そのころは音楽家。有名な、日本でもよく知られている「むすんでひらいて」はルソーの作曲だということになってます。それで、音楽の項目をルソーが書いているわけですね。ルソーは完全に反信仰であったわけではない。だから、全ての百科全書の寄稿者が反信仰であったとは限りませんが、でも、デイドロにしてもグランベールにしても、多くの『百科全書』の中心的な啓蒙主義者たちと言われている人たちは、「反信仰」——フランス語では《anti-religieux》という言葉なんです——をスローガンにして、旗印に掲げておりました。

そしてこれはそのあとに続くフランス革命にもそのまま受け継がれたわけですね。フランス革命はご承知のとおり、「旧制度」《ancien régime》という言葉が使われますが、「旧制度」を倒すということであったわけですよけれども、その「旧制度」というのは王政であり貴族政であったこと

は間違いないんだけど、と同時に、やっぱりキリスト教のいわば宗教的な体制も「旧制度」として倒される相手になっていたわけですね。

例えば、皆さんパリへいらっしゃれば必ずノートルダム寺院へ行かれるでしょう。あのノートルダムの大聖堂も革命中は閉鎖されて、祭壇は全部取り払われて、祭壇は舞台になって、そして、舞台の上ではいかにこれまで宗教が大衆をたぶらかしてきたか、ということを示すような軽演劇が演じられる、というようなことがありました。

それから実は、日曜日が七日目ではないのが革命暦なんです。革命政府は一週間を十日にしまして、七日目で休むというのは宗教的な習慣であるとして、だから7日目に休むというのをやめてしまおう、というわけで、一週間を十日にしました。それでも大衆は、それまで必ず日曜日にはミサに行ってたわけですね。聖体拝領を受けてたわけです。その習慣を捨てたくない大衆たちに対しては、革命政府は「理性祭り」というのを提供しました。

毎日曜日、祝日にあたる日に、少女を理性の女神として選びまして、白い着物を着せて、パリの場合ですが、郊外に小さい丘を築きまして、その山の上に少女をたてて、革命政府のお偉方が、人間理性がいかにすばらしいものであるかということを、あたかもミサ中の司祭の説教のようにして演説をするわけですね。そしてそのあと聖体拝領のかわりに、その小高い丘に刻まれた階段を登って行って——これが昇階唱に当たるんだと思いますが——その少女が着ている白い着物に接吻をして、「理性バンザイ」と叫んで、降りて行って、それでお祭りが終わる。というようなことを革命政府は大衆に提供していたわけですね。

例えばドイツでも似たようなことが起こりました。ドイツではそういった意味での革命はこの時期には起こっていませんが。例えばカントですね、有名な哲学者のカントは、「啓蒙とは何か」という——本じゃないんですが、いま日本では本になって岩波文庫に入っていますけれど——小さな論考ですけども、それを発表しています。彼の「啓蒙とは何か」《Was ist Aufklärung?》というタイトルの論文ですが、その中で非常に注目すべきことは何かというと、「啓蒙」とは人間の未熟状態を改めさせることである、つまり成熟させることである、という点です。では、

未熟な状態とは何か。カントはその未熟状態というものを定義してこういいます。「未熟な状態とは、人間一人ひとりが自分自身の理性と悟性とを使って判断することをためらい、代理人のそれに自らの判断を委ねることである」。それがカントの未熟状態の定義であり、「啓蒙」とは、そこから人間を脱出させることである。

「代理人」という言葉を聞かれて、キリスト教関係の方ならピンと来るだろうと思うんですが、大変人気のある作家の塩野七生さんという方が、私の一年後輩なんですが、『神の代理人』という本を書いています。つまり、「代理人」というのは、要するに、基本的には「教皇」のことを指しているわけですね。もちろんカントはあからさまにそうは書いていません。字面上をとれば、誰かの判断、誰か偉い人、誰かが決めてくれたことに自分の判断を委ねる、それが未熟状態であると。

でも、そのあとにすぐあからさまになるんです。カントが、何て書いているか。「特に、宗教における未熟状態がもっとも危険である」という一言を付け加えているんですね。最晩年のカントというのが現在の哲学史の中で大問題になってまして、彼が本当にキリスト教と絶縁したのか、というか、絶縁してはいたんですが、戻ってきてはいないのか、という議論はないわけではないんですが、少なくともそういう論考で見るとカントは、明らかに18世紀啓蒙主義的な、信仰、あるいはキリスト教信仰から、人間理性を独立させ、そちらを優位に置こう、という理念を体現している人の一人である、ということは明らかであります。

もう一人ご紹介すると——これはまたフランスに戻るわけですが、もうフランス革命は終わって、ナポレオン時代に入っています——ラプラスという人物がおります。このラプラスは《*Traité de mécanique céleste*》——直訳すると何でしょうかね、『天体の力学』とでも言いましょか、宇宙論の話ですね——を書いている。

ナポレオンという人は、実は「啓蒙主義」に対抗しようとした。と言いますと、また少し誤解があるかもしれませんが、やはり全体として見れば反動ですよ。つまり、フランスにおけるキリスト教信仰——カトリック信仰ですが、フランスの場合ですから。ユグノーを除けば。現在でもフランスはカトリック国だということになっているわけですが——それを

戻すきっかけをつくった人でもあるわけなんです。そのナポレオンに、ラプラスが書いた宇宙論の本を献呈したんですね。あの忙しいナポレオンが、けっこう厚い本なんですけど、最初から最後まで読んだ。で、読んだあとで、ラプラスを呼んで、「この本は宇宙について語っている。まあ面白いところもあったが、私にとって根本的な不満は、この宇宙を創った創造主である神に、この本の中で、一度も触れていない。「一度も触れてない」って言い切ったんですから、最初から最後まできちんと読んでほしいですね。すごいですね。

それに対してラプラスは、「私の宇宙には神様はいらないんです」と胸を張って答えたそうです。これがいわば啓蒙主義者の、何と言うか、心意気だと言ってばそういうことになりますね。もう、宇宙について、自然について語るときに、神について触れる必要は毛頭なくなったんです。

ラプラスというひとは、そういう意味では我々が考えているような科学の、もっとも重要な人物です。ニュートンが我々の科学の源だとよくいわれる、それはある意味ではその通りで、私はそれを否定するつもりはありませんが、でも、今の私たちの自然科学の、根本的な源は実はラプラスにあると、こう考えています。

なぜそうなのかというのは、ラプラスが、この力学の本のあとに、19世紀になって、1808年頃に書いた本の中で展開していることが「ラプラスの魔」——《Laplacian demon》と英語式に訳せるとは思いますが——と言われている。普通ヨーロッパでは、現在では、《demon》「魔、悪魔」という言葉を使うわけですが——ラプラス自身はそういう言葉を使わないで、《intelligence》「インテリジェンス」・「知性」という言葉を使うんですけども——その「ラプラスの魔」に象徴されるものが、いわゆるニュートン的な力学的世界観と言われているものを、最もよくあらわしたものだ、というふうにいわれていること、そこに論点を据えた上での話であります。

それはともかくとして、いずれにしても「啓蒙主義」によって、ヨーロッパは、特にヨーロッパの学問は、言ってみれば、いったんキリスト教から解放される。では解放される前はどうかだったかという話なんですけど、啓蒙主義以前ということで、ここにはみなさんよくご承知の名前を

並べてみました。コペルニクス、ケプラー、ガリレオ、デカルト、ニュートン。こういう人たちは、普通はですね、自然科学を築き上げた、当の最も重要な人物たちということになっています。

でも、彼らの信仰状況を考えてみると、コペルニクスの生きている時代に——15世紀の後半から16世紀の半ば近くまでなんですが、その16世紀の前半として何を象徴的に言えばいいでしょうか。1517年でしょうか。ルターがローマ教皇庁と絶縁する宣言をしたのが16世紀——つまり、コペルニクスが生きている真ん中のところで、ドイツにおけるプロテスタント運動が始まるわけです。コペルニクスはポーランドの人ですから、ドイツ語圏とかなり近いものでありますが、ただコペルニクスは当時のプロテスタント運動には全く関与しませんでした。彼は、最後はフロムボルクというところの司教座聖堂——司教座聖堂というのは英語で言えば《cathedral》「カテドラル」ですね、教区の代表の司教がおられる教会のこと。フランス語やイタリア語では《dôme》、《duomo》、まあドイツ語でも《Dom》ですけれども——その司教座聖堂付きの聖職者として生涯を終えたひとであります。

ケプラーは、洗礼をプロテスタントで受けましたので、プロテスタントであります。チュービンゲンという大学——これはルター派の根拠地ではありますが——そこで学んで、牧師をめざしたんですけれども、いろいろ事情があって、彼は牧師にはなれなかったんですね。でも、プロテスタントの信仰は決して捨ててはいません。実を言うとですね、なぜ牧師になれなかったかという、かれはチュービンゲンの大学で学生である頃に、コペルニクスの地動説をたいへん熱心に擁護するんですね。

皆さんご存知かどうかわかりませんが、聖書の文言を挙げてコペルニクスの地動説を叩いた最初の人は、実はルターなんです。「ヨシュア記」という『旧約聖書』のひとつの書がありますけれども、その中に出てくるヨシュアという預言者に関して語られているところで、イスラエルの人たちが敵と戦っているときに、自分たちの勝利がもう目の前に見えている、でももう日が暮れかけている。日が暮れちゃうと、当時ですから、夜戦なんていうのはあまりなかったでしょう、だから戦いが途中になっちゃう。そこで、「もうちょっと日よ留まれ、ギデオンの丘に」——「月よ留まれ」だったかな、忘れちゃいましたが——そういうふうに祈ったら、

そしたら日は動きを止め、そして、イスラエルの民が勝利を収めた、という文章があるわけですね。そこを引いてルターは、「あのコペルニクスという男が天地をひっくり返そうとしている。愚か者が、自分の賢さをひけらかそうとして、その天地をひっくり返そうという愚かな試みをしている。しかし、聖書によれば、動いているのは日であって、太陽であって、地球ではないことは明白ではないか」ということを述べているわけですね。

これは実は——別にここがカトリックの学校だからという訳ではないですが——当時のカトリックの教皇庁は、コペルニクスの地動説に対して、何も言ってません。むしろ、当時の教皇庁にも大変力のあったカプアの枢機卿ジョンベルクというひとがいるんですが、その人はローマからコペルニクスに、1536年くらいだったと思いますが、あなたの学説は素晴らしい、どうか自分たちの手でより多くの人にあなたの学説を広めさせてもらいたい、という依頼の手紙さえ送っているわけですね。

そのコペルニクスの最終的な本ができあがったのが、1543年ですか、彼の亡くなった年なんですけど、それからしばらくの間は、教皇庁はいつさい、コペルニクスに対して何も言っていません。それから70年くらいたって、1616年だったと思いますが、実は教皇庁の『インデックス』、要するに『禁書目録』にコペルニクスの1543年の本が載るわけですが、これは実はガリレオ対策であったと言われているんですね。

じゃあガリレオはどうだったか、というと、これはもう明白にカトリックの人間です。当時のイタリア人ですから、これはごく自然なことですが。しかも彼は教皇庁と極めて密接な関係にあって、しょっちゅうローマに出かけていっては、教皇庁のお偉方と友達づきあいをするわけですね。その中には、当時の教皇庁の秘書役であったベラルミーノという枢機卿もいますし、それからマッフェオ・バルベリーニという枢機卿とはたいへん肝胆相照らす仲になって、このバルベリーニは「ガリレオこそアルプスの南側の空に輝くもっとも美しい星である」というようなかなり甘ったるいガリレオ賛歌を書いて、ガリレオに捧げたりしているわけです。しかもそのマッフェオ・バルベリーニは、やがて教皇に推挙されて、ウルバヌスⅧ世として教皇の地位につきます。

いわゆる皆さんご存知のガリレオ事件と呼ばれているもの、1632年の

ことですが、このガリレオ事件のときの教皇はその、くだんのウルバヌスVIII世なんですね。つまり、ガリレオ賛歌を書いた枢機卿、マッフェオ・バルベリーニが教皇になっているわけです。非常に不思議な状況なんですね。これには推理小説並みのいろいろな裏話があって、一代前の教皇ヨハネ・パウロII世がポーランド出身の方でしたから——先ほど申し上げたようにコペルニクスがポーランド出身ということで——ガリレオ事件に深い関心を示されて、特別の調査委員会を教皇庁の中に設けられまして、いろいろな新しい資料も見つけて参りました。それらが公開されるにしたがって、1632年のガリレオ事件がいったい何だったか、ということに関しては、少なくとも従来のガリレオ事件の解釈とはかなり違った解釈が与えられるようになってきておりますが、いずれにしてもガリレオのカトリック信仰は、全くゆらいではいません。

それからデカルトですが、デカルトも近代哲学の祖というふうにいわれるわけですがけれども、彼もまたカトリックの人間です。彼の『哲学の原理』という、最後に書いた四巻本がありますけれども、その中で彼は——これはもう一番最初に書いた『方法序説』の中にもある程度出てくるわけですが——神の存在論的な証明に全生涯をかけた、と考えられております。

彼は、ガリレオよりはるかに後輩ですから、ガリレオはデカルトなんて歯牙にもかけない。ところがデカルトはですね、アルプスの南側にいるガリレオに大変関心を持っていて、その辺また面白いですね。「ガリレオはある意味でほら吹きだ。彼が言っていることで正しいことは私が見つけている。あとはみんなホラだ」と言っているくらいに敵愾心を燃やして、「自分がアルプスの北側の最高の哲学者である。南側にはガリレオがいるという話だけれども」と、それはもちろん彼も認めているわけですが。それくらい、対抗意識をもやしていたのは、まあデカルトの方でした。いずれにしても二人は、自分たちこそ、カトリックの思想界を代表する哲学者であると。「哲学者」ですよ。ガリレオもね。

ガリレオは、最後はトスカーナ大公国の、トスカーナ大公国大公付き主席数学者兼哲学者という職名をもらっている。大公というのは《arch-duce》ですね。彼が生れたフィレンツェの国は、当時はトスカーナ大公国となっており、ハプスブルクが封じる、封土するものでした。もとも

とはフィレンツェは長らく共和国だったんですが、ちょうどこの17世紀に入って、まあ16世紀の終わりからですが、列強——フランス、それからハプスブルク——がアルプスの北側のいわば絶対王政国家に近いものとして、属国のような形にするんですね、イタリアの小国を。ですからミラノはフランスの属国のような形になり、フィレンツェはハプスブルクの属国のような形になり、ナポリはスペインの属国のような形になる。したがって、ガリレオの最後の職業は、ハプスブルクという世俗権最大の権力機構の出先機関であるトスカーナ大公をパトロンにした、たいへんな羽振りだったんですね。しかも教皇庁ではそういった、自分に賛歌を書いてくれたような人が教皇になっているというわけなので、まことに見事なサクセスストーリーの主人公がガリレオであったということになります。彼の生まれは貴族でもなんでもない。お父さんのヴィンチェンツィオという人は音楽家で、音楽史の方ではガリレオのお父さんが書いた書物というのは非常に重要な文献のひとつになっています。

さて、じゃあニュートンはどうなのか。イギリスの場合は——離婚事件に端を発したといわれますけども——ローマ教皇と絶縁をして、国教会という、国王が国教会の首長も兼ねるといふかたちの新しい教会組織を作ったわけですね。したがって、少なくともローマカトリックの目から見れば、プロテスタントなわけですね。アングリカンは普通のプロテスタントの諸派とはだいぶ違ってまして、例えば聖職者のことを、アングリカンの場合は「牧師」といわずに「司祭」といいます。それから sacrament、儀式も、かなりカトリックのミサに近いかたちを残しています。そういう意味ではちょっと複雑なプロテスタントなんです。

ニュートンは国教会には与しないけれど、実は神学者でもある。彼は聖書学者でもある。ただし、正統的な、と言っていいのかどうかわかりませんが、キリスト教の基本的な概念としての三位一体論は否定する。これはアタナシウスという教父が勝手にキリスト教の中に落とし込んだ概念であって、本来イエスの教えの中には三位一体論というのはないよ、というのがニュートンの神学的な立場なんですけれども。

ニュートンという人は実は、晩年は何をやっていたかという、大蔵省に入って印刷局長官のような、お金を作るころの責任者を務めていました。それから、錬金術には生涯没頭していました。彼の錬金術文

献というのは山ほど残されていますが、あまり公開されておられません。錬金術なんてやっていたというのが、ニュートンの科学者としての評判を落とすから、ということになるのかもしれませんが。その文献のほとんどは、有名な経済学者のケインズが——彼は非常なお金持ちでしたから——買い取って、「ケインジアン・コレクション」というかたちで今日に伝わっております。

いずれにしても、こういう人たちを「科学者」とは呼べない、ということはかなりはっきりしている。少なくとも現代的な意味での科学者とは呼べない。彼らは本質的にキリスト教信仰の中にいた、ということになります。問題はですね、じゃあ、今お話したような人たちがどういう学問の伝統にいたか、ということを考えますと、それはいわゆる「十二世紀ルネサンス」ということになるわけです。

「ルネサンス」は、先ほど申しましたように、15, 16, 17世紀を指します。ミシュレだとか、ブルクハルトといった人たちが洗練させていった概念なわけですけども、ところがこの20世紀に入って「十二世紀ルネサンス」という言葉が歴史学の中になんかしっかりした概念として登場してきました。現在では、いわゆる本家本元の「ルネサンス」よりも、ヨーロッパの歴史のなかではこの「十二世紀ルネサンス」の方が大事だ、という人さえいます。

「ルネサンス」《renaissance》というのは《renaitre》「もう一回創り直す」という意味ですが、《naitre》というのは、《nature》という言葉と同じ語源——ラテン語の語源——で、「生まれること」です。したがって、「改めて生まれること」が「ルネサンス」という意味です。

もちろん先ほど申しましたように、ミシュレやブルクハルトといった人たちが「ルネサンス」という概念を提案したときには、それは主として、古代ローマの人間観といったようなものが、改めてヨーロッパに回復されたのが「ルネサンス」だ、という言い方だった。でもヨーロッパにとって、本当に古代ギリシアやローマを、自分たちの手にいわば回復したというか、改めて入手したのは、実はミシュレやブルクハルトの言う15, 16, 17世紀ではなくて、12世紀なんだ、というのがこの「十二世紀ルネサンス」の概念の出発点です。

ご承知のように、イベリア半島は、現在のスペイン・ポルトガルの国々がある半島であります。ヨーロッパの一番西にあって、ピレネー山脈を挟んで北側がフランス、南側がイベリア半島ということになります。今このピレネー山脈はバスクと呼ばれる民族独立派の人たちが、スペインに対して独立運動をしている係争の地であります。

7世紀、622年が、ヒジュラであって、イスラム暦の元年ですが、そこに始まったイスラムの文化というのがあつという間に、イベリア半島最南端の、今通常ジブラルタルといわれている海峡がありますが、そのジブラルタル海峡を渡って——ジブラルタルという名称は実は、そのときに、そこに岸壁があるわけですが、その岸壁の岩を登って進軍した、そのイスラム軍を率いていた指揮官の名前からとられているといわれているんですが——一挙に北進して、ピレネー山脈を越えるんですね。イスラム軍は、8世紀になるとそうして北進して、ピレネー山脈を越えて、一挙にフランスの奥地まで攻め込んでいきます。

当時ようやくキリスト教を中心とした、ヨーロッパという概念が一体感をもって語られ始める頃です。西ローマ帝国の滅亡後、退廃した西ローマ帝国のあとがようやくキリスト教を中心としたヨーロッパという概念で統一されつつある、そういう時期であります。敵ができると統一の理念が高まるわけで、そこで、ヨーロッパが——NATO軍みたいなものでしょうか——イスラム軍に対抗して戦いを挑んで、少しずつイスラム軍を南へと押しやるわけです。押しやって、均衡点がピレネー山脈になります。しばらくの間はピレネー山脈の南側は完全にイスラム化するわけですね。

ところがそれでも満足できなかったヨーロッパの側が——あるいはキリスト教徒が、とっていいかもしれませんが——少しずつイスラム軍を南へ南へと追い落としていく運動が始まります。これが「レコンキスタ」《reconquista》——《conquista》というのは、英語でも《conquer》という言葉が「征服する」という意味ですが、それと同じ語源から来しています。直訳すると「もう一度占領しなおす」ということになりましょうか——と呼ばれている運動です。そして、それが少しずつ南へ南へと移っていくんです。

皆さんがよくご存じの巡礼地であるサンティアゴ・デ・コンポステレ

ラは北、マドリードはほぼ真中、近くにトレドという街があります。このトレドという町はたいへん素敵な町で——とくにエル・グレコという画家がおりますが、彼のゆかりの地で、とても素敵な美術館もありますが——そのトレドの町が、いってみればキリスト教の側にもどる。その時に、イスラム軍が捨てていったものがたくさんあったわけですね。逃げたイスラム軍が捨てていったもの、その中に非常にたくさんの本があった。本と言っても、みんな巻物です。しかも、印刷ではなくて「手写本」《manuscript》ですけれども、本がたくさんあった。

今までイスラム教徒が支配していたところへ、もう一回キリスト教的な社会を作り上げるわけですから、当然教会を作る。そこへ赴任してきた大司教が、たまたまそれらの捨てられていた本を読もうとした。ところが当然アラビア語で書いてあるから読めない。そこで、大司教がアラビア語の読める人たちを集めてきて、このトレドの町で、一種の翻訳のセンターみたいなものを作るわけです。で、アラビア語で書かれている書物を、どんどんラテン語に翻訳する、というキャンペーンをトレドの町で始めるわけです。

じゃあその文献は何だったかという、イスラム教徒たちが8世紀に、東ローマ帝国にあったギリシア・ローマの様々な学問的な文献をすべてアラビア語に翻訳していたもの。つまり、イスラムでは、8世紀、9世紀に、ギリシア語で書かれていた、例えばプラトン、例えばアリストテレス、その他もろもろのギリシア・ローマの学問的文献を、全部アラビア語に翻訳していた。どこでやったかという、例えばアレキサンドリアだとかで、いろいろなカリフが、こういう文献の翻訳をさせるわけですが、12世紀にヨーロッパでは、トレドの町で、今度はそのアラビア語からラテン語への翻訳をする、というわけですね。

つまりここで初めてヨーロッパが古代ギリシアの、あるいはローマ時代の学問、プラトン、アリストテレスはもちろん、いわゆる天動説の、プトレマイオスの『アルmagest』という著作だとか、あるいはエウクレイデス（ユークリッド）の『幾何学』だとか——そういうギリシア・ローマの学問文献を全部アラビア人たちがアラビア語に翻訳していた——それを今度はラテン語に翻訳する。初めてヨーロッパ人たちはこれを知るんですよ。アラビアを通じて、イスラムを通じて。それまでヨー

ロッパ人たちは、これを受け継いでないんですよ。これを受け継いだのは東ローマ、さっきも言ったようにビザンチン。西ローマ帝国のあとに成ったヨーロッパ圏というのは、ほとんどこのギリシア・ローマの文献を受け継げなかったんです。これはもう、戦争でごちゃごちゃになっていましたから。

例えば一つだけ典型的な例を申し上げれば、アリストテレスという大哲学者がかつていたわけですね。彼の書いたものというのは、日本では岩波書店で『アリストテレス全集』という翻訳がありますが、あれはもちろん、偽書——アリストテレスでないものでアリストテレスとして伝えられている書物——も入ってますが、いずれにしても書棚に両腕の幅ほど大量ですね。その中でこの時期までにヨーロッパがアリストテレスの著作として知っていたものは、『*Analytica Priora*』『分析論前書』という——これは小論理学と言われているものですが——論理学の教科書みたいなもの、それだけだったんです。それ以外のものはまったく伝わってなかったんですね。

だからこの時期までのヨーロッパ人たちは「アリストテレス？ ああそんな奴がギリシアにいたそうだね、ちっぽけな学者で、何か論理学の本を書いた人だね」というくらいの認識しかもってなかった。ところが、イスラムにはイブン・スィーナという大アリストテレス学者がいました。イブン・スィーナというのはラテン語ではアヴィセンナと言われている人ですが、そういう大アリストテレス学者がいましたから、アリストテレスの著作というのはほとんど完璧なかたちでイスラムに受け継がれていた。それを、ここで、初めて、ラテン語に翻訳することによって、ヨーロッパ人たちは手に入れたということになります。それがヨーロッパの学問の始まりなんです。

レコンキスタは全体では七百何十年くらいかかって——最後のグラナダの解放が1492年ですから——ちょうどコロンブスがアメリカを発見したと同じ年に、グラナダが最後に落ちるわけですね。だからレコンキスタ運動は15世紀までかかるんです。

トレドを中心として、今申し上げたようなことが起こった。そこで何が起こったかという、そういうかたちで初めてヨーロッパ人たちは、

例えばアリストテレスの全貌を知った。その知った結果として、アリストテレス主義をキリスト教信仰と結びつけた「スコラ学」というものが生れます。これがヨーロッパの学問の源です。今でもたぶんそうだと思います。今でも、ヨーロッパの学問の出発点がどこにあったかというところ、この「スコラ学」にあったということができるとおもいます。最も有名なスコラ学者としてはトマス・アクイナスを挙げればよいわけですが、何もトマスばかりではありません。

それと同時に、同じ時期に、実は大学という制度が生まれました。そしてこの、大学という学問の府を生み出したヨーロッパで、その学問をやっていく制度と、それからその制度の中で行われる学問の内容とが、ここに、はっきりした形で姿をあらわしてくるわけですね。これがヨーロッパの歴史を決定付ける、一つの出来事だったと考えていいと思います。

面白いのはですね、「スコラ学」の中でこういう概念が生まれてくる。神は二つの書物を書いた。一つは言うまでもなく『聖書』です。これは神の言葉として語られてきた。神の言葉なんだけれども、人間に分かるように人間の言葉で書かれている。もう一つの書物は何かって言うと、それは「自然」だ。なぜならば、ユダヤ、キリスト教の信仰体系の中で、「創世記」というのはかなり重要ものですが、その「創世記」で、神はこの世界を「創った」。この「創った」というのと、日本の『古事記』のように「生れた」というのは全然違うんですね。作られたものを調べていけば、作った者がどういう思いでこれを作ってるかっていうことがわかるじゃないですか。例えば時計を見る、歯車が何枚、天樞があって、ぜんまいがあって…。そうすると、歯車が2倍になっていけば、これを作ったひとは、回転数を半分にとそうとしている、というようなことが分かるわけでしょう。

創られたものを見ると、創った者のいわば意図、これはラテン語では《voluntas Dei》「神の意図」という言葉で呼びますが、その「神の意志・意図」が、デザインが、「創られたもの」を調べていけば分かるじゃないか。だから「自然」というのは、神の書いたもう一つの書物。それを一ページ一ページ丹念に読み解いていけば、神がなぜこの自然をこういうふうにつくり、そこの中になぜ人間をこういう形で置いて、どこへ世界

を導こうとしているのかということも、追々わかっていくはずだ。『聖書』を読むのと同じような意味で「自然」という書物を読むべきである。

で、有名な《artes liberales》、《liberal arts》「リベラル・アーツ」です。三科は「論理学」と「文法」と「修辞学」。四科は「天文学」と「幾何学」、「算術」、「音楽」。

奇しくも『聖書』は人間の言葉で語られている。三科は言葉の学問、というか、学問じゃないんですね、《arts》ですから、「技」なんですね。その「技」を身に付けることによって、人間の言葉でかかれたものを読み解いていき、読み解いた結果を人に伝えることができる。コミュニケーションができる。そのために身につけておくべき「技」が「論理学」、「文法」、「修辞学」。

そして、「天文学」、「幾何学」、「算術」、「音楽」は、まさに「自然」を読み解いていくために身に付けておくべき「技」です。ここで「音楽」があるのはなぜかという、この「音楽」というのは、私たちの「音楽」とは少し違います。「音楽」も数学の一つであるということは非常にはつきりしています。

例えば一本の弦があって——弦でも管でもいいんですが——それをびんと張ります。これを弾きますと、何か音がします。それがCの音だとしましょうか。それを今度は1対1に分割して、ここに琴柱をおいて——この場合は両方とも同じですが——一方を弾きます。そうするとここで得られる音はCのオクターブ上、8度上ですね。これを1対2に分けます。2で得られる音というのは完全5度ですね。弦楽器をやる方、ヴァイオリンやチェロをやる方は——コントラバスは違いますが——ご存じのように5度5度で調弦しますから、5度というのは、ちょうど3分の1のところを押さえると、隣の弦と同じ音がします。従って、2対1に割った2のところ得られる音はCに対してGですね。完全5度、G。

というふうにしていくと、この自然界の中の秩序、音の秩序というのは算術的秩序でもあるんですね。1対1とか、1対2とか。こういう「比」、これを《ratio》と英語でも言いますが、《ratio》というのは文字通り《ratio》「理性」でもあるわけです。合理的な、神の理性。神は合理的な存在だから、この自然界を創ったときにこういうように合理的に創って、音の世界でも合理性がちゃんと完結されている。そういう発想

なんです。

だから、12世紀以降のヨーロッパでは、「暗黒の中世」で、「自然」なんか全然関心もたれなかったなんて、それは全くの嘘っぱちで、『聖書』を探究するのと同じ熱心さで「自然」の探究が行われた。これはもうはっきりしているんですね。

ですから、ひとつだけ分かっておいていただきたいのは、ヨーロッパの学問の伝統の上に築かれた「自然科学」というのは、まさにこの「スコラ学」的な自然探究を土台にして、出発点にしている。そこから外れてない。確かに我々の科学が生まれたのは、19世紀以降のことです。さきほど申し上げた「啓蒙主義」以降のことです。だから、ラプラスが言ったように、いったんキリスト教的なものとは無縁になります。確かに無縁です。今、「自然科学」をやる人は、キリスト教徒であろうが、イスラム教徒であろうが、仏教徒であろうが、無神論者であろうが、物理学をやることのできるわけだし、ライフサイエンスをやることできます。だから今の「自然科学」というものは、基本的にはキリスト教の学問の外にある。でも、その出発点の、考え方そのもの——自然現象は合理的な存在である、自然の中に合理性が貫徹されている、それを追究していくのが自然科学である、とすれば——その発想はまさに「スコラ学」から得ている、と言っていい。歴史的に見れば。これははっきりしていると思います。

ところがですね、それじゃあ科学はキリスト教が生んだんだ、と言った人がいるんです。それがこのリン・ホワイト・ジュニアという人で、これは現代の人です。我々の仲間と言っていいのですが、アメリカ人で、中世技術史の専門家です。このリン・ホワイトという男が、『*Machina ex Deo*』という本を書きました。その前に、実は『サイエンス』という雑誌の中で論文を発表したんですが、その論文が『*The historical roots of our ecologic crisis*』「現代の我々の生態学的な危機の歴史的な源泉はどこにあるか」という論考です。そしてそれをキリスト教に求めたんですね。このリン・ホワイトという人は。

20世紀の半ばすぎに、彼は、近代科学技術文明を——「地球」と言う言葉さえ使っているんですが——それを生み育てたものがキリスト教であ

ると、そう言うんです。それはしかし、科学を礼賛し、だからキリスト教が生んだのは立派であった、といたいのではないで、むしろ告発したんですね。

どういう意味でかという、これはまた「創世記」に戻るんですが、「創世記」の世界創造の最後の日、神が人間を創った後、何と言ったかという、「産めよ、殖えよ、地に満ちよ」という有名な言葉がある。その後、「空を飛ぶ鳥、地を這うもの全てを支配しなさい」という言葉が出てくるわけですね。これをラテン語では《dominium terrae》「地の支配」というんですけれども。つまり神は人間に、人間のすむ大地、世界を支配させようとしている。それを人間は受け止めて、自分勝手にやりたいことをやったもんだから、今や生態学的な危機が訪れているんだ、というのがリン・ホワイトの言い分なわけです。

つまり、かつての啓蒙主義的な歴史観に従えば、キリスト教は近代科学技術文明に対して敵だったわけです。今度は一転して、一転どころか360度転換して、むしろ近代科学技術文明を生んだ責任者として弾劾されている、というのが実は今日の状況の少なくともある部分ではある、ということはわかっていただければと思います。

ただですね、私はこのリン・ホワイトの言い分と言うのは、少し片手落ちだ、と思います。なぜかという、18世紀以前に、キリスト教が支配していたヨーロッパ世界に、極端な自然収奪が起こったか、ということなんです。なるほどヨーロッパの自然林っていうのはほとんどないんですね、今は。ドイツの有名な「シュヴァルツヴァルト」、「黒い森」と言われているあの鬱蒼と茂った森たちも、実はあれは人工林です。イギリスなんかでは、17世紀から18世紀にかけて、もう完全に薪がなくなってしまって、たいへんなことになった。まあそれから石炭が使われるようになるわけですが。

ただ、現在私たちが考えているような科学技術文明における自然収奪とは意味が違う。だって、薪をたいているのはどこでもやってきた。牧畜民族は放牧をして緑を枯らしてきました。メソポタミア文明だって、キリスト教とは全く無関係なのに、砂漠を作っちゃいました。そうするとですね、どうもそうじゃないんじゃないか。つまり18世紀啓蒙主義以後に、人間が、自分の理性だけで自然を管理し支配していいんだ、とい

う発想を持ったことが間違いだったんじゃないか。

リン・ホワイトは、キリスト教の中にも救いはある、というんですね。それは、アッシジの聖フランチェスコ。ご存知のように、アッシジの聖フランチェスコは太陽を兄弟とし月を姉妹とした。そして、動物と語り、小鳥と語り、常に全ての被造物は人間の友である、という立場に立ったわけで、彼らを支配しようとはしなかった。

確かにそうなんですけれど、ただ、この告発が意味しているところに、キリスト教、あるいはユダヤ教を含めてもいいかもしれませんが、「人間中心主義」があることだけは確かだ。それを《anthropocentrism》という言葉で呼んでいます。《anthro》というのはギリシア語で「人間」ですね、「人」ですね。《pithecus》が「猿」ですから、《pithecanthropus》というと「猿的人」、《pithecusanthropos》で「猿的人、猿人」になるわけね。ですから《anthropology》というと「人間学、人類学」です。《anthropocentrism》で「人間中心主義」。確かに、被造物の中で人間だけが特別な存在であることは確かだ。それをどういうふうにかけて行くか。これを最後に考えたい。

例えばね、日本で考えてみますと、日本の風土病に日本住血吸虫症というのがありました。汚染地域は北九州の一部、広島、それから山梨。いずれも河川が非常に豊富にあるところで、淡水貝であるミヤイリガイというのが中間宿主で、日本住血吸虫というのが体内に入りまして、そのミヤイリガイの中で育った幼生が、田んぼの中なんかで傷から人間の体に入って、肝臓を冒して死に至らしめるというけっこう怖い病気ですが、そのミヤイリガイは、一応絶滅したってことになっています。北九州の一部ですね、このミヤイリガイを絶滅させちゃったもんだから、供養塔を立てた。供養塔というのは、写真を見ましたけれど、なかなか日本人は味なことをやると思うんですけどね。

実は日本で完全に絶滅はしてないそうなんですけれども、たとえミヤイリガイが絶滅したからといって——現在、国際生物多様性の条約が結ばれていて、締約国がこの10月に名古屋に集まりますが——いわゆる世界の動物や生物を保護することをうたう人たちが、ミヤイリガイを絶滅危惧種には指定しませんよね。あるいは狂犬病や、痘瘡、天然痘のウイルス

が絶滅したからといって、誰も文句を言わない。

だとすると、我々はべつにユダヤ、キリスト教の思想に基づかなくても、——確かに仏教には全ての生命を大切にする、という思想はあるんだけれども、その仏教徒でさえも——ミヤイリガいの絶滅に文句は言わないだろうと。天然痘のウイルスの絶滅に文句を言わないだろう。まあ実は天然痘のウイルスも完全には絶滅はしていない。世界でロシアとアメリカに保護されているんですが。何か起こったときにもう一回ワクチンを作るために用意してある。

つまり、どの世界だろうと、人間の便宜を全く無視した「全ての生命を大事にしましょう」という発想は、いったいできるのかどうか。それは、我々は自分自身に問いかけるべきだ。キリスト教の「人間中心主義」というものをどう理解するかということと同時に、キリスト教を離れた、ある種の「人間中心主義」というものから私たちは逃れられるのかどうか、ということをお互いに考えながら、少しずつ考えを進めていくのが妥当ではないだろうか。

現在、特にプロテスタントのキリスト教の世界から、あの「支配せよ」というのは、実は「管理しなさい」ではなく、「人間が自然のお世話役、スチュワード、スチュワーデスになりなさい」という理解で進めていこうじゃないか、という考え方も出てきています。

現在、我々の中にある「人間中心主義」というものをどう評価するかということ、を、たまたま、国際生物多様性年でもあるので、話題の最後のところは、そんなお話をしてみました。

つたない話で申し訳ありませんでしたが、ご清聴ありがとうございました。